

## 訪中団に参加して

人見 彰彦

高野修氏(藤沢市文書館長)を筆頭にして個性豊かな団員20人が、昨年10月25日～11月1日にかけて、北京・南京・上海の公文書館(档案館)や人民大学档案学院を訪問することができた。

飛行機の窓より初めて見た中国大陸は、広大であるが、森林に乏しく、荒涼とした様相を示していた。その間を遥かな距離を置いて長江(揚子江)や黄河がゆったりと蛇行して流れ、薄褐色の鈍い色を反射させていた。うっとりと思

蕩れているうちに飛行機は無事北京空港に到着した。

中華人民共和国の文書館は档案館と呼ばれ、各省・県・市・大学や少数民族地区など3,350か所に設置されており、そこに勤務している専門家は100万人を越えるとの事である。私達は北京の中国第一歴史档案館・中国人民大学档案学院、南京の中国第二歴史档案館、上海の上海市档案館を見学することができたが、いづこも

比較的若い人々を中心に目を輝やかしてマイクロ撮影に裏張り補修などに励んでいた。光学機器・電子機器等による記録保存の手法や、補修技術などについては、あまり見るべきものはないように見えたが、史料を記録・整理・保存しようとする意気込みには目を見はるものがあり、圧倒された。

私にとって最も印象深かったのは日本の気候に類似している南京での体験であった。町中にある中国第二歴史檔案館の門や閲覧室は朱・青などで彩られた宮殿風で、その中で20人程の人々が熱心に閲覧していた。その奥に真新しい四階建の収蔵庫(鉄筋コンクリート造り)があり、その屋根は瓦葺きで中国の伝統的建築であるかのように造られ、建物の表面も巧みに彩色されていた。その側に、崩れかけた国民政府(蒋介石)期の収蔵庫が、歴史の推移を物語っているかのように残されていた。ここの従業員数は180人(内130人は専門家)で、保管利用部、目録編纂部、歴史編纂部、技術部(例えばマイクロ撮影)、研究部(例えば「明国史の研究」)、明国档案雑誌編纂部等の各部門があった。その他、明国档案目録センターが付設されており、そこで目録集が刊行されている。また、専門家の多くが「孫文研究会」というような研究会に属しておられるという。

ここに収蔵されている史料で最多のものは、1911年から1941年にかけての革命期史料で約145万巻あり、置かれている書架の長さは約35kmになるといふ。次いで、国民党政府所蔵史料の移管されたものが約100万巻あり、この中の約70万巻は明国時代の史料で、その後、全国から収集し、現在、明国時代史料は約145万巻になっている。その他、中山(孫文)関係史料、袁世凱関係史料等々を収蔵しているという。

1980年以来、内外研究者への開放方針を進めており、40種以上の出版(数万巻になる)、「中山の一生」といった展覧会、南京大屠殺記念館の整備等々を行い、ここ数年は年間約5000人の人が5万巻以上の史料を利用するようになったという。

史料の公開は、いずれの檔案館も文書の完結後30年後以上を経過しているものを対象にして

準備をしているということである。しかし、実状はまだ準備中という部分も相当残されているようである。また、一般市民への公開についても、その実態を十分認識することは出来なかった。

この中国第二歴史檔案館の一隅に孫文が犬養木堂へ宛てて出した手紙の一部分が展示されていた。岡山の木堂記念館に残されている孫文の木堂宛書状類とは異なっていたが、これを見て俄然南京がより身近に感じ出した。木堂は孫文が日本へ亡命したとき彼を匿っている。その時日本人名を付けようとした時、孫文が「ある家の前を通りかかって何気なく見たら、中山としてありました。それを思い出して」(犬養道子著『犬養木堂』)「中山」にしたということである。この話を通訳の朱さんに話したら非常に喜ばれ、今後共、孫文・木堂関係の史料交換をしようと約束し、ささやかな日中交流の発展の一端を図ることとなった。1929年、中山陵が出来たとき、木堂は国賓待遇を受けて慰霊祭に出席している。私達も木堂が歩んだであろう道を歩き中山陵を詣でることができた。

もう一つ、南京での強烈な印象は「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」の訪問である。そこには日本軍による中国人虐殺の実態が生々しく展示されている。しかし、説明文と資料集の最後には、中日両国人民の友好のために「前事不忘、后事之師」にしようと結んでいる。これは史料保存・利用に携わる私達の基本姿勢でもある。この姿勢のもとに両国の友好発展が築かれるのではなかろうかと、しばし感慨に浸った。

北京で第一歴史檔案館の関係者と夕食を共にしたとき、1996年の文書館国際会議が北京で開催されることが決定したというニュースが発表された。全員で「乾杯<sup>カンペイ</sup>」し、また北京で「再見<sup>サイチェン</sup>」しようと祝いあった。南京では、来年開催される孫文研究大会に是非出席するようにと誘われた(犬養木堂の関係)。上海では間もなく竣工する新檔案館を訪問するようにと要請された。

実りある諸体験を胸に納めて、「再見<sup>きょうねん</sup>」を心<sup>またあしう</sup>に決めて日本への帰路についた。

(岡山県総務部学事課)